

県境を越えた取り組み

最近、中山間地域の再生に観光機能を取り入れる事例が増えてきている。また、今後導入されようとしている道州制の議論などを通じて、県境とは何かを話題にしたシンポジウムや会議が開催されることは少なくない。しかし、県境はあるが、古くから共通の自然環境、歴史・文化、産業と併せ共通の課題を抱える各市町村は、県境を越えて交流の輪を広げ、共通課題の解決や地域の活性化を図ることを目的に広域的な連携に取り組んできている。

本誌では、県境がもつ課題を整理し、課題を克服するために実施されている事例を紹介し、今後の県境のあるべき姿を考察する。

県境がもつ課題について

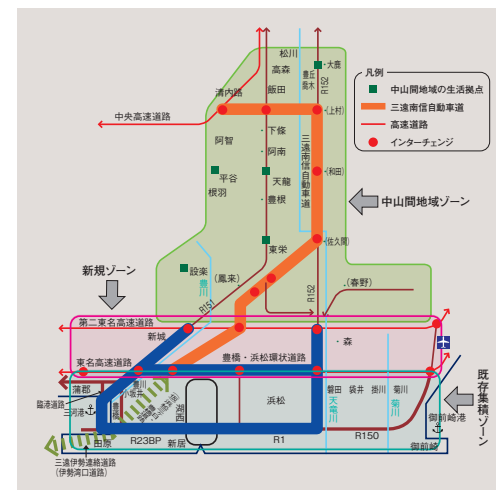
県境における地域づくりは、上述のように共通の自然環境、歴史・文化などから県境をまたぐ形で進められている。特にわが国が「多極分散型の国土形成」を打ち出しはじめた80年代後半頃から多くの地域において地域連携が活発に行われるようになってきた。しかし、県境をまたぐことは、少なくとも2つの行政単位を巻き込むため、統一した行政施策支援を得ることが単独行政内活動よりも困難である。

また、市町村合併による広域自治化(例: 県境を越えた合併の存在)や、今後予想される道州制の導入は、従来の行政枠を越えた連携や地域づくりにとって新たなステージを迎えることになる。

さらに、少子高齢化の影響は県境、すなわち中山間地に直接・間接的に大きな影響を与えており、複数行政単位による効率的な地域活性化を今まで以上に推進していくことが求められている。

事例1：三遠南信地域

三遠南信地域とは、愛知県の東三河地域、静岡県の遠州地域、長野県の南信州地域の3地域を指す。この地域には一級河川である天竜川や豊川が流れ、また1994年には三遠南信自動車道の開通という共通軸が生まれた。そこで地域づくり団体が中心となり、三遠南信地域の一体的な振興発展と、より一層の交流と地域連携を図るために、関係市町村と商工会議所・商工会、国・県、地域住民の協力と参加の下、「三遠南信サミット」が3地域持ち回りで開催されている。本年度で17回を数え、昨年には地域連携ビジョンが策定された。地域連携ビジョンでは、「三遠南信250万流域都市圏の創造ー世界につながる日本の中央回廊ー」を基本コンセプトとし、「日本の中央回廊の形成」「大伊勢湾環状地域を構成する中核的都市圏の形成」「流域循環圏の形成」を役割としている。特に、本地域は天竜川・豊川によって生まれた豊かな自然



三遠南信地域のゾーニング(三遠南信連携ビジョンより)

に恵まれ、生活、文化、産業が形成されてきた。また、上流の中山間地域と下流の都市地域とは水の供給をはじめ、人々の生活や産業活動において相互依存関係にあり、今後も、一体的に成長していくためには、上下流域が従来にも増してお互いを認め合い、広範な分野で広域的に結びつき、循環サイクルという仕組みを構築する必要がある。そのために、地域の特色を最も理解かつ活用している住民を主人公に「住民セッション」を実施している。

事例2：富士箱根伊豆交流圏づくり

富士箱根伊豆交流圏の市町村(静岡県、神奈川県、山梨県)が、圏域の自然環境、歴史、文化等を活かし守りながら、連携して交流を進め、課題の解決に取り組むことにより、人が集まり活気あふれる圏域を形成することを目的に富士箱根伊豆交流圏市町村ネットワーク会議を設置し活動している。観光、広域連携推進、防災という3つの部会活動の他に、年1回交流圏サミットを開催し、行政が主体となり県境をまたぐ活動の重要性を確認し、連携を強固なものにしている。

第9回サミットは、昨年11月に「これからの自治体連携 SKYの可能性」をテーマに山梨県富士吉田市で開催され、1. 本ネットワーク会議は、富士山を中心とした豊かな自然環境、歴史、文化等を活かし守りながら、①道州の区域案や国土形成計画のエリアにかかわらず、圏域としての魅力を



第8回富士箱根伊豆交流圏市町村サミット

高め、安心して安全な圏域の振興発展のため連携強化に向けた施策を進める、②富士箱根伊豆圏域の様々な資源を最大限に有効活用できるよう広域的に連携を図り、観光資源の魅力向上やリーフレットの作成等による圏域の情報発信に取り組む。③住民、観光客が安心安全に生活、過ごせるよう「災害時相互応援に関する協定書」の実効性をより高めるための取り組みを推進するなどの宣言をしている。

今後は、観光が中心となるが、民間レベルでの交流活動に展開していくことがポイントであろう。

事例3：ナニャトヤラ連邦

青森県南東部と岩手県北部の16市町村は両県境地域の名称を、「北緯40°(度)ナニャトヤラ連邦」と決定した。9月には青森県八戸市で「第6回全国県境地域シンポジウム」を開催し、来年1~3月にはB1グルメ3年連続準優勝のせんべい汁などを食べ歩いてもらう「北のコナモン(粉物)博覧会」を実施する予定である。

この2県の連携は、連邦にあたる本地域が江戸時代の旧南部藩領であるということ、また、現在も住民の行き来が多いことが発端で、今後は観光客誘致などでも協力を深める計画である。

これら3つの事例は、ただ単に隣接県と連携を深めることで地域の魅力を地域内外に発信するだけではなく、人づくりやネットワークの構築などを通じて、今後ますます重要となる地域力を向上させる方策の1つと考えられよう。食や観光がキーワードとなるケースが少なくないが、地元の目に見える課題のみではなく、今後の潜在的な共通軸を見出していくことも重要な視点である。



「ナニャトヤラ連邦」の16市町村